
翠惺

水無月レイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

翠惺

〔 τ 〕
〔 Π 〕

N 0 9 1 3 X

【作者名】

水無月レイ

【ぬりかべ】

400年前

江戸時代・春の京都・

陰陽師と姫

「私はお前のために戦う……」

誰よりも守りたい・・・」の気持ち・・・

「好きです・・・」

第一幕「春の香り」と、冬の闇・・・

400年前・・・・・

江戸時代・・・・・春の京都・・・

桜印の本家・・・・・

「清明様・・・今日も、^{ひなせ}桜が美しいですね」

「そうだな・・・・・。燈？惺？」

私は、燈？惺、京都の姫・・・。

清明様は、妖怪を払う陰陽師で「桜印清明」・・・。

清明様はほんとうにお優しい・・・・・

時は過ぎ・・・冬になつた・・・

京都の奥底の暗い闇の中・・・

「桜印のやつらを・・・叩きのめすときが来た・・・。

「われら妖怪の時代だ・・・・。」

「これからが、われらの時代だ・・・・・

行くがよい・・・妖怪たちよ・・・・・。桜印家のものはすべて皆殺しにしろ!」

「ははー炎舞様。」

「炎舞はにやりと、わらつた・・・・。

妖怪たちが炎舞とやらりと、おじぎをし・・・
京都の町へ出た・・・・。

その頃、清明たちは・・・・・

「清明様・・・どうするのですか・・・・・」

と一人の陰陽師が清明に焦りながらいった・・・。

「清明様・・・・・。」

燈？惺は清明を見つめた・・・。

「どうするんだ！！西のほうから妖怪が攻めてきてる
そうじやないかつ！！」

もう一人の活発の口うるさい方の陰陽師は

清明に文句をいう・・・。

清明なにも、言わない・・・・・。

「くそつ！、どうすれば、・・・・・？」

その部屋にいる、陰陽師ほとんどが、手を握り締めて、
唇をかんだ・・・・・。

そうすると、清明がいつた・・・。

「やつらを、倒す・・・・・。」

清明は、決心をした。

「倒すって・・・分かつているのか・・清明！

相手は百鬼いるぐらいなんだぞ！－いや・・・もつといふかもしけ
ないのに・・・

何を言うんだ・・・！」

「では、このまま見ていろというのかつ！」

清明のそのときの顔は、少しこわかつた・・。

それに圧倒されたほかの陰陽師は清明に従うことになつた・・・。

妖怪たちは、今日の夜にせめて来るらしいのだ・・・。

そして、時間は流れ、夕日がでて、向こう側の空からは
月がうすくみえてきた・・・・。

「清明様つ！」

燈？惺が総会の部屋で一人になつた清明にはなしかけた。

「危険です。おやめください・・・！」

清明はなにもいわない・・・。

「清明様・・・ダメです・・・。」

「燈？惺は少し涙目になっていた。」

「燈？惺・・・私はお前のために戦う・・・。」

私が勝てないとおもつてるとか・・・？」

清明がやっと口を開いた・・・。

「そうではありません・・・私は・・・。」

「燈？惺・・・私はお前が好きだ・・・。だれよりも好きでいたいと願っている。だから、お前、燈？惺を守りたい・・・。」

好きだから・・・。」

清明は燈？惺に行つた・・・。

「清明様・・・うつ・・・。」

私はいきなり目がくらんだ・・・薬か何かでくちを抑えられた・・・。

「清明様・・・。」

「ごめんな・・・燈？惺・・・。」

第一幕「白い闇」

目を開けると、暗闇の中だつた・・・・・。

「ここはどこだらうかー

私は、一人牢獄の中にいた・・・・・。

「晴明様・・・・・ここは・・・・」

私は、白い着物をきたまま、牢獄の中にいた。

周りには、飢えて死にそうな囚人が壁に横たわつていて、

私がいることに気付きもしないぐらいだつた・・・・・。

「早くここからでないと・・・・・。」

牢の外は、やけに騒いでいて、その音が牢に響いていた。

「私は何でこんなところに・・・・・早くでないと晴明様が・・・・・。」

私は不安のあまり一晩眠りについてしまつた・・・。

・・・・・・・・・なにがおきたかも・・・・知らずに・・・・

起きたときは朝になつていた・・・・。

囚人たちは、昨日と変わらず壁に横たわつていた・・。

私が牢からでようとしたその時、向こうの階段から足音が聞こえてきた・・。

「詰まらんな・・・この世は・・・

・・・だ、だれなの・・・

私はこつそと、壁の方から、階段の方をみつめた・・。

「ん・・?」

目があつてしまつたような気がした・・・。

声の感じからすると、男のようだ・・。

しかし、男の周りにもたくさん側近がいるようだ・・。

どんどん、牢の方に近づいてくる・・・。

私はとにかく焦つた・・。きっと様子からみると、晴明様が言つて

いた

妖怪の百鬼であろうう・・・。

・・・どうすれば・・・

ドサッ

そのとき私は誰かに押し倒された・・・。
えつ・・・・

「何だ、囚人か・・・詰まらん、殺せ。」

男は隣にいた側近に命じた。

そうすると、側近は弓を取り出し、囚人の背をめがけて矢をはなつた・・・。

矢を放つた後、男たちはそこから去つた・・。

けれど、その男は明らかにわたしにきづいていた・・。

男は最後に、私を見つめて「またあおうぞ・・・。」といつて、行つた。

「大丈夫でございましたか・・・。」

矢を打たれた囚人は私を守つてくれたのだ。

「なぜ・・私を・・」

私は何故自分が助かつてしまつたのだろうと思わずにはいられなかつた・・。

「あなた様は私たちが罪を犯しても、大切にしてください・・た・
そのご恩を・・今お返してきて・・ほんとうに・・・よか・・つ
た・・。」

囚人は目をつぶつたまま、一度とあけることはなかつた・・。

私は目の前で一人の人間を、消してしまつた・・・。

私は何とかして牢をでることができた。
一段一段地上への階段を登つていつた・・・。

あたりは一面真っ白で、私以外に誰もいなかつた・・・。

私は、真っ白雪の上を走つた。

少し進んだところに、兵がいた。

「あの・・・いつたいどうしたのですか・・・。

・・・・えつ・・・いやつ・・・」

その兵は死んでいた・・・。

その向こう側をみると、雪の上は赤く染まつていて、兵が何人も倒れていた・・・。

「晴明様つ・・・・・」

私は、すべての場所を探し続けた・・・。

すべての場所を・・・・・。

最後に行つた場所・・・・・桜の木の場所・・・・・二人の場所・・・・。

「・・・・はあ・・・・・はあ・・・・・」

私は走り疲れて息切れがひどかつた・・・。

私は立ち止まつた・・・・・・

「・・・・・晴明・・・・・様・・・・・晴明様・・・・・つ・・・・」

私は白く染まつた桜の木に横たわる晴明に駆け寄つた・・・。

第二幕「別れ」

「晴明様っ！…………」
私は晴明のそばに駆け寄った……。

「燈籠惺…………か…………」

「そ、そうです……。」

私は感情を抑えることが出来なかつた……。

目の前にいる傷だらけの彼があまりに悲しそぎた……。
涙が出てきた……。

「燈籠惺、何故泣いているのだ……。」

「晴明様なぜこんなになるまで…………わたし…………なんか…………」

「そんな顔をしないでくれ…………私はお前のために戦うことがで
き…………。」

うれしいよ…………」

「私も…………です…………。」

「燈籠惺、思い出を大切にしてく…………れ…………。この桜は私たちの大

切な場所だ……。

燈籠惺…………」

「はい…………晴明…………様…………」

「愛して…………いる…………。」

「私も…………です…………。」

彼は一度と目を開けなかつた……。
何度、何度、呼びかけても……。

私は叫び続けた・・・何度も何度も・・・。泣き続けた・・・本当に大好きだった・・・。優しくては、あつたかくて、

守ってくれて、たくさん愛してくれた・・・。かけがえのない存在・・・。

「晴明様・・・私も愛しています・・・。誰よりも大好きです・・・。」

私は彼のそばにずっといた・・・。

今私がみている桜は、真っ白な悲しい桜・・・。私は何日かたって、たくさんの兵を埋めた・・・。残っている兵は、ひとりとして、いなかつた・・・。

桜印家は消えてしまった・・・。残つたのは、桜と私だけ・・・。一人で過ごしたすべてのものが消えてしまつた・・・。

5日たつたある日の夜・・・。私は桜のある場所を眺めていた・・・。

私は何が起こつてしまふのかも、わかっていないなかつた・・・。

何かが私の胸につきさつた・・・。

「・・・えつ・・・」

背後で誰かがニヤリと笑つた・・・。

私は、そのまま倒れた・・・。

「晴明・・・さ・・・ま・・・。」

バタツ
・
・
・

第四幕「時の流れ」

「こには、私は矢で刺された……はずじゃ……」

そこはいつもの桜の木だった……。晴明との思い出の場所……。
しかし季節は、夏……。

「私があいた桜の木は、たしか……冬……。」
ガザ・・・ガサツ・・・

向こうの草村の方から、誰かがやつてくる音がきこえる・

燈籠惺は、急いで隠れようとしながら、間に合わなかつた……。
「あつ・・・・・」

「・・・・・・・・・」

私はやつてきた人の姿に驚いた……。

晴明にそつくりな男の人だつた……。

私は嬉しくて、悲しくて、切なくて、こんなにも愛しているか、
実感を感じた。どんなに大切だつたか……。

「大・・丈夫・・か・・・・・?」

その男の人は、とても心配している顔と声で私のそばに
近づいてきた……。

私は涙が止めることが出来なかつた……。

私は思わずにはいられなかつた……。

私は手を差し伸べる彼に、抱きついた・・・・・

「晴明様・・・・・」

俺は引きつけられるよう、桜の木のところへ・・・
いつも見に行つてゐるが、今のはちがう・・・・・。
本当にだれかが呼んでるような気がした・・・・・。

俺はその日の夜に桜の木のもとへ行つた。

行つてみると、誰かが桜の木の下に座つてゐる・・・。
銀髪で、色鮮やかな着物を着ていて、とても美しい・・・・・。
俺は目を奪られた・・・。

彼女は俺の顔をみると、何故か涙を流している。
声をかけると、彼女は悲しい顔をする・・・・。

手をのばすと、彼女は抱きついてこつた・・・・・。

「晴明様・・・・・」と・・・・・・・・・・・・

第五幕「はじめ」

燈籠惺は強く強く彼を抱きしめた。。。

燈籠惺「晴明様。。。。」

燈籠惺は男の顔を見上げた。

男「。。。。」

燈籠惺「はつ。。。。あなたは。。。。」

燈籠惺は気づいた。。男が晴明ではないこと。。。

バタッ！

燈籠惺は倒れてしまった。

男「お、おいつ！」

男はとつさに倒れてくる彼女を支えた。。。

燈籠惺（あなたは。。誰なの。。）

時とは、流れゆくもの。。
けつして、変えることのできないもの。。
誰にでも、一人では支えきれない思いがある。。
悲しみや切なさや愛。。。
どうすることもできない死。。

（会いたい。。。会いたいです。。。晴明様。。。）

燈籠惺「ん・・・・・・・・・・」

? 「ここは、神社。桜印神社だ・・・。」

燈籠惺「あなたは・・・」

燈籠惺の目の前にたつてていたのは、さつきの晴明に似た男であつた・・・。

ひのえ すい

男「俺は、緋乃柄 翠・・・。お前は誰だよ・・・。なんで

俺の家の桜のところに」

ひなせ

燈籠惺「私は燈籠惺・・・です。いつたいここはつ・・・

晴明様はびうして・・・。」

翠「晴明つて、いつの時代の話だよ・・・。」

燈籠惺「えつ・・・・・。」

燈籠惺は彼の言つたことに、驚いた。

彼も燈籠惺を見てびっくりしている・・・。

確かに、きれいな着物を着ていて、銀髪の長い髪・・・。まるで、江戸時代の絵巻から出てきたよつた・・・。美しい姿・・・。

燈籠惺「ここには江戸ではないのですか・・・？」

翠「江戸って・・・ここには平成だけど・・・」

（「マイツ、なに言つてんだ・・・。）

燈籠惺「へ、平成とは・・・なんで・・・」

燈籠惺は本当に驚いた。ここはきっと江戸ではない時代
なのだ・・・もし、江戸であれば燈籠惺は矢で打たれて死んでいた・
・・・

翠「とにかく、何なんだ・・・お前は・・・。」

燈籠惺「私は・・・・・・」

燈籠惺は翠に自分の起きたことを、全て話した・・。
理解されないかもしけない・・けれどわかつてほしかった。
自分の気持ちを・・・

暗い闇の中・・・妖怪たちは今もつづめにいてる。

?「フフフ・・・・・・・。やつと来たか、燈籠惺・・・手に入れてみ
せるべ・・・・・。

「の世とともに・・・」

桜の光とともに、闇も動き出す・・・。
翠惺のよつこ・・・・・・・。

第六幕「破滅への入り口」

翠「妖怪…………妖怪にせられたのか。晴明つてやつせ…………」

燈籠惺「…………私が来たときは、晴明様は…………」

翠「じじいからは、晴明は妖怪に滅ぼされたって聞いたが、…………」

本当だつたとは…………」

燈籠惺「信じてくだれるですか…………？」

翠「ああ、妖怪はまだまだたくさんいる…………」

（妖怪…………あいつがいるかもしない…………）

翠と燈籠惺は、自分のあつた出来事話した…………。何もかもを…………。

時とは、理不尽なもので私たちの中にあり続ける。

翠「お前行くとこないんだる。しょうがないから、じいじさんよ…………」

翠はまじめな顔で私を見つめて言つた…………。

「

燈籠惺「えつ…………いいの…………ですか…………？」

燈籠惺は、翠に感謝しきれないほどの気持ちになつて言つた。

自分はなにも出来ないけれど……

翠（……燈籠惺か……どつかで聞いたことがある……呂つな……）

（

燈籠惺（晴明様にほんと似ている……でも……）

「本当にありがとうございます。翠様。」

燈籠惺は翠に笑いかけた……今はそれくらいしかできないのだから……

翠「あのわ……様はいいから、翠でいい……。」

燈籠惺「あつえつと……すみません。
では……す、翠……。」

そのとき、翠は少し頬が赤くなつてていた……。

翠「あと……あとさ……」

燈籠惺「はつはつ……なんでしょうが。」

燈籠惺は少し驚いた表情で聞き返した……。

翠「その敬語……やめてくれない……。調子狂つからぬ……。」

翠は少し小さな声で言つた……。

燈籠惺「すいません……。なれるまで時間がかかりますので……。本當に……すみません。」

翠「じゃあ、適當なところで寝てここから。」

燈繒惺「は、はい・・・。」

燈蝶惺は思つていた・・。

あんなはも晴明は二めだから二だから二
自分の無力感　ほんこはもつ二の三、ソーホノハツ二

無くしてしまったのだから。・・・。(

燈籠惺は用意してもらつた布団に入り、昔のことを考えた。・。

燈籠惺「晴明様・・会いたい・・。」

六

彼女はひとしづくの涙とともに、眠りについた

ペヨシペヨシ

鳥のさえずりとともに、太陽の光が部屋に差し込む・・・

燈籠惺（もつりょう） 「はあ……」

グキュー・・・

燈籠惺「おなかすいちゃつたなあ・・・」

燈籠惺は布団をたたむと、ふすま障子を開けて、廊下へと出て行つた。

燈籠惺（ずいぶん大きなお屋敷・・・。でも・・・本当に）
桜印家にそつくり・・・）

燈籠惺「んつ・・・？いに香り・・・。」

廊下の向こうから、とてもいい匂いの「」飯の香りがして、いた・・・。

燈籠惺はその匂いを追つて匂いのする部屋の前で止まつた・・・。

燈籠惺「いこ・・かな・・」

燈籠惺は息をのんでふすま障子に手をかけた・・・。

スウー

燈籠惺は静かにあけと・・・

そこには二人分の日本風で豪勢な料理が、並べられていた・・・。

燈籠惺「おいしゃう・・・。」

奥の台所では誰かいる・・・。

燈籠惺はこつそりその台所をのぞくと、翠が味噌汁を作つていた。

翠「何だ・・お前か・・そこには料理があるから食え・・。」

燈籠惺「あ・・はい・・・。」

燈籠惺は翠のエプロン姿に少し赤くなつてしまつた・・・。

燈籠惺（私、なんで赤くなつてんだらう・・・。でもほんと晴明様に似ている・・・。）

。 燈籠惺は席に着くと、自分用に並べられた、ご飯に皿を輝かせた・・・。

翠「何、ながめてんの・。早く食えよ。洗い物もしなきゃいけないんだからよ・・・。」

燈籠惺「あつはい・・・。頂きます・・・。」

燈籠惺ははにじつほほえんで、おこじそつて翠の作ったご飯を食べ

た。

（やんないおこじいのかよ・・・。）

翠は少し照れた顔で燈籠惺が食べ終わるのを待っていた・・・。

洗い物し終わり、翠は着替えをして、玄関に出了・・・。

翠「俺、学校に行つてくるから、お前はそいつの部屋で待つていろよ。」

「

燈籠惺「あの、学校とは・・・。」

翠「あの昔で古い寺子屋みたいなもん・・・。」

燈籠惺「・・・そうですか・・・。わかりました・・・。」

「待つております・・・。」

燈籠惺は少し悲しい顔をして、翠を見送った。
翠その燈籠惺の顔を見て・・・。呴つた。

翠「なるべく早く帰つて来るから・・・。」

それなりに、翠の氣遣いなのだから。

燈籠惺「はい・・・。」

燈籠惺は自分の部屋に戻り、また眠ることとした。

暗い闇の中でも・・・

?「我が、君主・・・なによつて、わこまつよ。」

?「あの姫をつれて、・・・なるべく怪我をやらなによつて、手荒なまねをしたら・・・わかつて、いるな。」

その君主は、手元にある鏡の中の女性を指差した。

?「はつー、おつかのままで」

その妖怪はすぐこの場を立ち去つた。

?「今、迎えに行くからな・・・燈籠惺・・・。」

新たな闇が動き始める・・・。

その世は、破滅へとつながつて、・・・。・・・。

第七幕「翠」

翠「あいつ・・大丈夫かな・・。」

翠は授業中にも関わらず、家にいる燈籠惺を、心配した。

先生「あいつ！緋乃柄。授業をちゃんと聞かんか。
いくらテストで100点でもな・・・。」

先生は参った顔で翠を注意した・・。

朝が過ぎ、昼が過ぎ、帰る時間帯になつた・・。

翠はちよつと学校の仕事ができてしまい・・・遅くなつてしまつた。

翠「はあ、はあ、なんでこんな時に・・・。」

その頃家では・・・・・・

燈籠惺「ん・・・・・・・・・・ふうあ・・・・

もうこんな時間になつてしまつました・・。

翠様は・・・・・

?「姫・・・見つけたぞ・・・・。」

燈籠惺「えつ・・・誰・・・・・・・」

庭の方から声が聞こえた・・・。

燈籠惺は立ち上がり、庭の方を見つめた。

後ろに気配を感じ振り向くと・・・

燈籠惺「さやつ！」

後ろから腕を捕まれた。

？「本当に美しい・・・。手荒なまねはしない方が身のためですよ。」

燈籠惺「あ、あなたは、妖怪・・・」

？「我ら、君主の願いでお迎えに上がりましだぞ。」

燈籠惺「イヤツ！」（助けてつ！晴明様つ！）

ブサツ！

？「うわああー！」

燈籠惺「刀・・・？」

妖怪の腕に刀が刺さつていた・・・。

燈籠惺はそのすきに、妖怪のそばを離れた・・・。

刀が投げられた法をみると、

そこには、翠が立っていた。

燈籠惺「翠様つ！」

翠「人の家に勝手に上がり込むんじゃねえ・・・。

お前大丈夫か・・・。」

燈籠惺「あつはい・・・。」

？「クソがつ！・・・人間の分際で、手をあげるとは、

食おうてやる・・・。んつ・・・お前人間ではないな・・・。」

燈籠惺「えつ・・・」（翠様は人間では・・・・・）

翠「そうだ・・・俺は妖怪。翠緑の妖怪・・・緋乃柄

翠だ！！」

時の歯車が回り出すとき・・・

一人の思いがすれ違う・・・・・・。

第八幕「真實」

燈籠惺「翠様が・・・・・妖怪・・・」

翠「俺は翠緑の妖怪・・・」

? 「翠緑だとつ・・・フツお前、緋乃柄家の生き残りか・・・」

翠「お前らのような妖怪のせいで一族がつ！」
といって、翠は刀を振り下ろした。。。

? 「フツただのザコがつ!
死ね——」

妖怪はそう言つて、鋭い爪を翠に突き立てようとした。

けれど

翠・サ二十九にお前た・・・・・

相手を一太刀に切りかかつた・・。

? 「クッ・・・・ソッ・・・・」

妖怪は跡形もなく、消えてしまつた。

燈籠惺は走り出した。行く場所も分からぬまま・・

燈籠惺「翠様が妖怪だなんて・・・晴明様を殺した・・・。」

ムサシノ

「#U#U」 -

転んでしまつた。登蝶狸はその場所に立ちすくんだ。

ボツ
・
・
ボツ
・
・

やかで雨が降り出した。毛衣とジーンズの調子だと荒れるたまには、

（私は何をしてるのだろう・・・。何でこんなにも悲しこのだから。）

晴明様に似ているから・・・信じていた。

大好きな人に・・どうすればいいのだろう・・・。

卷之三

何も、できないまま・・・。時間が過ぎていく。

？」
「大丈夫。」

燈蝶惺「えつ・・ダ・・レ・・?」

金髪の髪の男性が、私に手をさしのべた・・・。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0913x/>

翠惺

2011年12月16日18時01分発行